

富田林市埋蔵文化財調査報告5

富田林市錦織所在

# 錦聖遺跡発掘調査報告書

—大谷女子短期大学移転にかかる発堀調査—

1981

富田林市教育委員会

『錦聖遺跡発掘調査報告書』 正誤表

頁	行	誤	正
1	7	～第四紀洪積世	～第四紀洪積世
1	9	これも時代順に	これを時代順に
2	9	石器時外遺跡調査」	石器時代遺跡調査」
2	12	大阪阪教育委員会	大阪府教育委員会
6	10	197 <u>4</u> 年	197 <u>1</u> 年
6	11	197 <u>7</u> 年	197 <u>6</u> 年
6	18	追加 (注) 富田林市教育委員会『富田林市の埋蔵文化財－埋 藏文化財基本分布図一』(1978年)	

## はじめに

富田林市には数多くの文化財が残されております。なかでも埋蔵文化財は、いわゆる石川谷を中心として、特に多くの数量、種類が残存しており、現在知られているだけでも、その総数は70数カ所にも及んでいます。

今回の調査対象地となった学校法人 大谷学園の構内も、その地域のひとつであります。一帯は錦織遺跡と呼称され、古くは弥生時代からの遺跡として周知されています。

この附近には奈良時代の寺院跡とされる細井廃寺跡や「原田遺跡」「寺池遺跡」「錦織南遺跡」などが分布しておりますが、いずれも全容が明らかでありません。

これらの遺跡は、これから発掘調査を通じて、ひとつひとつその性格を明らかにしていかねばならないわけですが、いまここに報告することのできる発掘調査も、この一環として実施したものです。

最後になりましたが、調査に当たり多くご協力をいただいた、大谷学園に深く謝意を表すとともに、今後とも本市文化財行政に対し、みなさま方のより一層のご協力をお願い申し上げます。

昭和56年6月

富田林市教育委員会

教育長 福田治平

## 例　　言

1. 本書は、大谷女子短期大学移転にかかる富田林市錦織所在錦聖遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は学校法人大谷学園の依頼にもとづき、富田林市教育委員会が担当し、昭和56年5月14日から同年6月2日まで調査を実施した。
3. 本報告の執筆は、富田林市教育委員会社会教育課中辻亘、調査員 穂山洋、樋口美樹子、田口詠子が当った。
4. 調査ならびに本書執筆に当っては、大谷女子大学講師中村浩氏より多人な御指導、御助言を得た。また、調査に当っては大谷女子大学資料館、大谷女子大学庶務部、大谷学園本部および大谷女子大学考古学研究会、堺市四ツ池遺跡調査会の他に大阪府教育委員会文化財保護課富田林市事務所の御協力を得た。ここに記して謝意を表します。

## 第1章 位置と環境

錦聖遺跡は、富田林市錦聖町と錦織に位置する。遺跡は羽曳野丘陵の東麓方、市内の中をほぼ南北に貫流する石川の左岸段丘上にあって、南北900m、東西350mの範囲にわたって遺物の散布がみられる。遺跡の東方には金剛、嵩城山脈が一望できる。

遺跡の所在する付近の地質学的な構造をみると、石川両岸に広がる平坦面は、洪積世末期の段丘堆積物（砂疊層）が、これにつづく西方の丘陵地は、第三紀鮮新世へ第四紀洪積世にかけて堆積した大阪層群によって形成される。

錦聖遺跡の面する石川両岸の河岸段丘面には繩文・弥生から歴史時代にいたる集落遺跡が数多く分布している。これも時代順にみると、繩文時代前期の錦織遺跡は標高75mの石川の河床と約5m比高差をもった段丘面にある。遺跡の範囲は遺物の散布からみて、南北300m、東西200mと推定される。弥生時代になると、石川中流域の段丘面に、喜志、中野の両遺跡が出現する。これらの遺跡は、弥生時代中期を中心とした集落址と考えられる。中期以降になると、市内南部の高地に遺跡が移動する。こうした遺跡は石川の右岸にみられるもので、彼方、滝谷遺跡などがある。

古墳時代になると、石川両岸の平地を一望する位置に多くの古墳が営まれる。錦聖遺跡の西方を南北に延びる羽曳野丘陵上には甘山古墳<sup>(注4)</sup>、真名井古墳<sup>(注5)</sup>をはじめとする前期の前方後円墳が位置する。これらの古墳はいづれも4世紀末の築造と考えられる。そのうち錦聖遺跡に最も近い甘山古墳は、全長48m、後円部径30m、前方部幅22m、後円部高さ5m、前方部高さ2mをはかるものである。後期になると、群集墳という多数の墳墓が成立する。同時期の古墳には、横穴式石室という画一的な内部構造がみられる。このような特徴をもつ古墳は、石川右岸に認められる。田中古墳群は標高約120mの石川を西方に見おろす丘陵上に位置し、眼下には西野々古墳群が点在している。また、嶽山の西斜面には23基からなる嶽山古墳群がある。

一方、石川の西方の羽曳野丘陵上には、7世紀初頭の築造と考えられるお龜石古墳<sup>(注6)</sup>がある。直径15m、高さ3mの円墳で、横口式家形石棺を有している。この石棺の周囲には飛鳥時代の平瓦が壁状に積み上げられており、同質の瓦が丘麓に位置す

る新堂廃寺にみられることは興味深い。

さて、歴史時代になると、新堂廃寺をはじめとして、錦型遺跡の北方には奈良時代前期の寺院址である細井廃寺があり、東方には平安時代の瓦を出土した錦織廃寺<sup>(注7)</sup>がある。新堂廃寺は、四天王寺式に類する伽藍配置をもつものと推定されており、飛鳥時代寺院址の一つとして、また、当時の仏教文化の伝来を裏づけるものとして重要である。

(中辻 亘)

- (注1) 北野耕平「錦織掘文遺跡について」(『古代学研究』第5号、1951年)
- (注2) 梅原末治・島田貞彦「河内国南高安及び當志石器時外遺跡調査」(『京大考古学研究報告』第2冊、1917年)
- 渡辺昌宏・芝野圭之助『喜志遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会(1978年)
- 尾上 実『宮志遺跡一東阪田遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会(1980年)
- (注3) 中村 浩編著『中野遺跡発掘調査報告書』富田林市教育委員会(1979年)
- (注4) 梅原末治『近跡調査せる河内の古墳』(『考古学雑誌』第5巻第3号、1913年)
- (注5) 藤 直幹・井上 薫・北野耕平「河内における古墳の調査」(『大阪大学文学部国史研究室報告』第1冊、1964年)
- (注6) 猪熊兼勝「飛鳥時代墓室の系譜」(『研究論集Ⅲ』、奈良国立文化財研究所学報第26冊、1976年)
- (注7) 石田茂作「飛鳥時代寺院址の研究」(1936年)  
大阪大学国史研究室『河内新堂廃寺』(『第1期調査報告』、1960年)

## 第2章 遺構の調査

### 1. はじめに

調査は短大用地をA、B二地区に区分し、各々に数本のトレンチを設定するという方針のもとに進められた。予定地を東西に横断する幅約4mの道路を境に、両側をA地区、北側をB地区とし、A地区には第1～第4トレンチを、B地区には第1～第5トレンチを設定した。その結果は、一部で自然地形による谷状の落ちこみを検出した以外には、遺構、遺物ともに顕著なものは見出せなかった。以下、その概要を記すこととする。

## 2. A 地区の調査

### 第1 レンチ

南北80m、幅2.5mのレンチで、機械力による掘削を行った。長大なレンチであるうえ、北半部は何度か崩壊したため、精査、実測、写真撮影終了後、順次埋め戻しながら掘り進めていくこととなった。

断面を観察すると、表上下にすぐ地山があらわされた南半部と、谷状の落ちこみを検出した北半部とに大別される。南半部の地山層の地質は、明灰黄色土、灰黄色土、淡黄灰色土などであり、明らかな洪積層であった。それに対して北半部では、南から地山面が3段になっておちこんでおり、部分的な小隆起はあるものの、3m以上に及ぶ深さで一貫していた。これは西方の丘陵地帯の尾根にはさまれた谷地形の延長部分と見られ、地山の上層には灰青色、灰緑色系の層が厚く堆積しており、その上に床土、耕土の検出を見た。旧耕作面をみると、南から45m付近で耕土とみられる黒灰色土があらわれ、55m付近までは、ほぼ水平面をなしているので、その下層は盛土を行ったものと解される。55m付近で急におちこむが、これは畦畔の土手と見られ、かつては石垣をもって築造されたものようである。この石垣周辺で杭及びその痕跡が数本見られたが、肩位で見る限り、石垣と何らかの関連を見出せるか否かは決し難い。さて、一段落ちこんだ耕作面は65m付近までひとつの面をなし、再びたちあがって北へひろがっている。いずれにせよ、谷状の地形に盛土を行い、3段にわたる整形をもって耕作面を造成したことが知られるのである。その時期は最下層の灰色砂質土から占伊万里の破片を検出したことから、早くとも近世に入ってからといえよう。

### 第2 レンチ

全長13m、幅1.5m。ここでは、第1 レンチ南半部と同じく、表土下はすぐに地山であり、黄灰褐色土、明灰黄色粘質土などの洪積層であった。

### 第3 レンチ

東からほぼ一定のレベルで続く地山面は、10m付近からたちあがり、斜面をなす。耕作面は黒灰色土、暗灰褐色土、黒灰色土などの層に見られ、前後2回にわたる造成がしられる。いずれも、下層には盛土を行って整地している。第1 レンチと同

じ谷状地形の一部である。全長 14.7 m, 幅 1.5 m。

#### 第4トレンチ

谷状地形の一部。地山面に盛土をしたのち、耕作面を造成している。耕土は淡黒灰色土を呈する。西半部の地山面は、南隣の第3トレンチとほぼ同一レベルにあるが、東半部はやや高まりを示している。このことは、第1トレンチの北半部で一部地山が小さく隆起していることと対応するようである。全長 10.6 m, 幅 1.5 m。

### 3. B地区

#### 第1トレンチ

全長 66.5 m, 幅 2.2 m, 現地表面に、断続的に、しかも薄く黒色土が見られ、これは耕土が残存したものであろう。その下層にも断続的に黒灰色土が見られ、やはり耕土である。北端部では地表下約20cmで地山面に達するが、南端部では地表下約90cmとなっており、ゆるい傾斜となっている。

#### 第2トレンチ

第1トレンチと直交するトレンチで全長 58.9 m, 幅 2.4 m。第1トレンチとまったく同じ層位の傾向を見せている。黒色土、黒灰色土はそれぞれ第1トレンチの、上下二層にわたる耕土と対応するものであり、二度にわたる造成がおこなわれている。西から東へかけてゆるい健斜を示す地山面である。従って第1トレンチでの所見とあわせ見ると、北西方面から南東へむかって緩い傾斜面をなしていたことが知られる。

#### 第3トレンチ

第1、第2トレンチを設定した面の1段下の面に設定したトレンチで、両面の比高差は約 2.1 ~ 2.2 m である。表土下は黄灰色土で盛土しており、その下層がすぐ地山となっている。全長 16m, 幅 2 m。

#### 第4トレンチ、第5トレンチ

第3トレンチの盛土を除去するとすぐ明灰黄色粘質土があらわれ、これが地山である。各々全長 2.2 m, 2.8 m, 幅 1 m。

#### 4 むすびにかえて

以上、各トレンチの断面観察を行ってきたが、これらによって、A、B両地区ともに既に削平がかなり進んでおり、遺構遺物をとどめないことが明らかとなった。また谷状のおち込み部は、周辺からの流入土、盛土が5m前後みられ、調査は困難をきわめたが、旧地表面下には、何ら遺構、遺物を検出する部分はなかった。

(積山 洋、田口詠子)

### 第3章 遺 物

調査の結果出土した遺物は、A地区第1トレンチで陶磁片11点、土器片2点、瓦片2点、B地区第3トレンチで瓦片1点の合計16点のみであった。

いずれも細片であり図示することが殆んど出来ないが、以下に代表的なものについてのみ記述し、その責をまぬがれたいと思う。

#### ①磁器片

6.5×3cmをはかる白色の素地にあい色の草花らしい文様を付した所謂染付の徳利の肩部の破片である。恐らくは江戸末～明治初期の伊万里焼であろう。

#### ②磁器片

2.3×3.4cm, 2×1.5cm, 2.4×3.2cm, 2.8×2.5cmを各々はかる染付の細片である。その素地の色調から同一個体の可能性を有する、網目の文様を有する伊万里焼の飯茶碗の破片と考えられる。

#### ③磁器片

7.2×4.5cmをはかる椀底部の破片である。高台の径5cm、高さ0.7cmを各々はかる。底部に文様を伴うがそれが何を示しているのかは不明である。



図 出土した遺物の写真(1/2)

#### ④陶器片

8×3.5cmをはかるスリ鉢口縁部の破片である。条痕は3mm間隔で浅く細い。全体を復原することは出来ないが比較的大きな個体となることは容易に推定される。同一個体と考えられる破片(3.6×3cm)も1点出土している。

この他、磁器片、土器片があるが、その旧形を想定するにはいたらない。いずれも幕末～明治のものと考えられる。

(積山 洋、田口詠子、樋口美樹子)

### 第4章 結語にかえて

今回の調査は、錦聖遺跡内における大規模な範囲であったため、遺跡の内容等を知る上で貴重な調査であったと言える。錦聖遺跡は富田林市教育委員会が、1974年から<sup>(注)</sup>1977年にかけて実施した結果、南北900m、東西350mにわたって弥生土器、石鐵、土師器、須恵器等の遺物の散布が認められた。

調査の結果、遺構等の検出をみなかった。断面観察でもわかるように、削平等により整地されたことがよくわかる。

錦聖遺跡内においては、大阪府教育委員会によって調査等実施されているが、今回調査を含めて、遺跡の一角を明らかにしたにすぎず、遺跡の内容等は将来の調査によって一層明らかになるであろう。

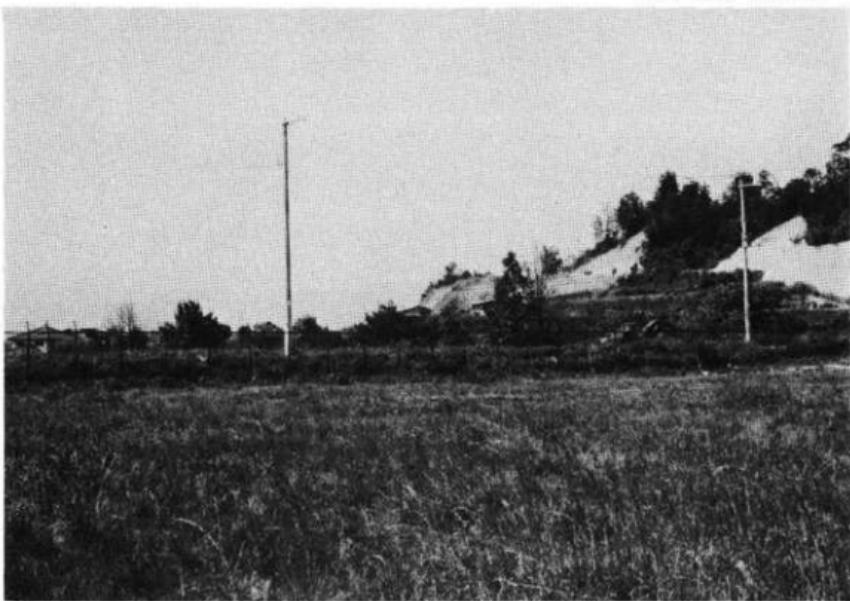
(中辻 亘)



調査箇所の位置とトレンチ配置図



A地区全景（北から）



B地区全景（北から）



A地区第2トレンチ



B地区第1トレンチ

